

〈書評〉

Guillaume Lamy, *Discours anatomiques et Explication mécanique et physique des fonctions de l'âme sensitive*,
édité par Anna Minerbi Belgrado.

Universitas, Paris

Voltaire Foundation, Oxford, 1996, 183pp.

寺田元一

1993年より『自由思想と地下文学』叢書がアントニー・マッケンナを編集責任者として同じ出版社から刊行されている。本書はその第三弾として最近出版された。「93年より」と書いたが、93年に *Parité de la vie et de la mort. La Réponse du médecin Gaultier* と Simone Tyssot de Patot, *Voyages et aventures de Jaques Massé* が出版された後、三年間何も出ず、やっと本年、ラミの本書と *De l'Examen de la religion attribuable à Jean Lévesque de Burigny* が刊行されて、叢書の体をなしたというのが実相である。92年に刊行開始が予告されていたこの叢書の刊行が翌年に延びて、極西で細々と進められているこの叢書の成りゆきを、極東から詳しい事情もわからず見守っていた日本の18世紀自由思想研究者は、いろいろと気をもんだものだった。それゆえ、手稿をヨーロッパの図書館などで直接読むことの難しいわれわれにとって、今回の三年間の空白もまた多くの心配の種であったが、やっと続きが出たことで、今後さらに多くの知られざる18世紀フランス地下文学作品が、優れた欧米の研究者の批評版として20世紀末の極東に届けられるという希望をつなぐことができたわけである。

この叢書と踵を接して刊行された、赤木昭三『フランス近代の反宗教思想 —リベルタンと地下文学—』（岩波書店、1993年）は、困難な研究条件の中で、手稿でしか読めないものも含めて、18世紀フランスの地下文学世界を日本で始めて網羅的に紹介した。これは、日本における地下文学の研究水準を一気に引き上げる画期的な著作であった。それゆえ、現在日本で求められているのは、『自由思想と地下文学』叢書の刊行に象徴される国際的な研究動向と、赤木の業績を踏まえながら、残念ながら赤木の目に届かなかったような接近困難な作品をこの叢書なども通じて読み解き、赤木が分類・表化した地下文学世界の、立体構造やネットワークさらには啓蒙思想との関係まで解き明かすような研究を行うことである。

さて、前置きが長くなったが、以上のような研究の文脈を抑えた上で、ラミの本書の紹介に移ることにする。*Discours anatomiques* も *Explication mécanique et physique des fonctions de l'âme sensitive* も、実をいうと、いわゆる地下文学ではない。というのも、前者は1675年、後者は1677年に、どちらも出版許可を得、著者名も明記して出版されており、その後も印刷物で読まれたからである。三百年以上も前に刊行されたこともあって、日本はもとより欧米でも参照す

ることが難しいということから、ラミの著作の中でも唯物論的色彩が強く、後の自由思想や地下文学、フランス唯物論との関係で重要と思われるこの二著の批評版が、わざわざこの叢書の中に組み入れられたらしい。

『解剖論』は出版をめぐる、著者とパリ大学医学部の一部の権威者——ラミは彼らを「ガレノス派」と呼んでいる——との間で悶着があったようで、その間の事情が、著者による友人宛の五通の手紙という形で語られている。この悶着のせいで出版が差し止められていたため、『解剖論』はこれをたまたま入手したとされる第三者が著者の許可なく勝手に出版したという体裁を取っている。こうした逸話に長く関わっても益はないので、本書の内容紹介へと進む過程で、著者と「ガレノス派」との対立点などについて必要な範囲で触れる。

『解剖論』は全体としてみれば、今から三百年以上も前の時代の解剖学概論に相当する著作であり、現代人にとってはすっかり時代遅れになり語る価値もないような身体の諸部位に関する記述が多数ある。解剖学史のうちにこの著作を位置づけようとするなら別だが、思想史的にはあまり重要でないそうした細部には立ち入らず、この著作の基本的立場をここでは主として紹介したい。ラミはのっけから非常にポレミカルに自分の旗幟を鮮明にする。それは徹底した反人間中心主義、反目的論である。ここで人間中心主義というのは、被造物のうちで人間を最上位に置き、人間を他の被造物すべての支配者とするような、『創世記』に由来する考え方であり、それは、被造物すべてが人間のためにあるとするような目的論を含意している。ラミはそれに対して、太陽にしても花にしても果実にしても人間を益することもあれば害することもあるとして、人間中心主義が単なる人間の虚栄心の産物にすぎないと喝破し、世界が人間や目的とは無関係に必然的に運行していると説く。

この立場から、ラミは身体も考察する。そしてここで、彼はガレノス派と対決することになる。ガレノス派によれば「人間は必要とするすべての部分を自然によって授けられるほど自然に愛されている」ので、身体には無駄な部分は少しもなくすべて目的や用途にかなうように造られているということになる。これに対して、ラミは身体には無用であったり有害であったりする部分もあることを具体的に示し、また、誰も空が飛べたらよいと思うのに「なぜ人間には羽根がないのか」と反問することによって、反論する。その上で、彼が採用する立場は、彼自らがデモクリトス、ヒポクラテス、エピクロス、ルクレチウス譲りとする機械論的立場である。それによれば、すべての身体部分は物質の運動の盲目的必然性によって形成されたのであり、目的とは無関係とするものである。もちろん身体の各部分はそれなりの役割を果たすが、それらは構造に由来するのであって、けっして目的にしたがって構造が造られたわけではない。

校訂者のミネルビ＝ベルグラドは、ラミがこうした機械論的立場を展開するに当たって参照したと思われる箇所を、ルクレチウスの『物の本性について』だけでなく、デカルトの諸著、ガッサンディ『自然学』、トーマス・ウィリス『獣の靈魂』など同時代の著作も丹念に当たって注記しており、たいへんに有益である。哲学史においては目的論批判というとデカルトからスピノザのラインが強調されて、ガッサンディやウィリスなどの登場する余地がないのだが、さすがにミ

ネルビ＝ベルグラーはその辺りの生理学方面での事情を Jacques Roger, *Les Sciences de la vie dans la pensée française du XVIIIe siècle* なども参照しながらよくフォローしている。

興味深いのは、ラミが原子の運動を盲目的必然と捉え、例えば『哲学断想』や『盲人書簡』のディドロのように、偶然とは見なしていないことである。ディドロなどは、原子の偶然の戯れからどうして秩序ある世界が生み出されたか、また一旦成立した秩序は再び原子の偶然の戯れというカオスに逆戻りしないかという問題をアポリアと考えて、生涯これと格闘し続けるが、ラミはいったん生み出された各部分の構造は他の部分や全体との関連で安定した役割を果たすようになり、秩序とカオスの相互転化を深刻には考えていないようである。

ここから、ベールが『歴史批評辞典』の項目「ディカイアルコス」で批判した創発主義的な見方に通じるような発想も、ラミに登場してくる。「創発」は聞き慣れない用語であるが、それは、系の個々の成分には見られなかった特性が、系において始めて現れるとする考えで、17世紀末辺りに影響力を持ち始め、18世紀初めにトーランドやコリンズがイギリスで、フランスでは、この『自由思想と地下文学』叢書で1993年に校訂版の出た Abraham Gaultier, *Parité de la vie et de la mort*, 1714などで展開されている。ラミの言い方は「諸部分の数、構造、位置の帰結」として諸部分の機能を説明するというもので、この観点が心身問題全体に貫かれれば、靈魂の機能もすべて組織の産物となり、靈魂自体不要になると思われるが、そこまでの展開を17世紀人ラミに期待すべきではない。

それでも、ラミは、各器官にその活動を支配するある種の意識のようなものを「能力」として認めるガレノス派の生氣論的な議論にはきっぱりと反対している。18世紀のフランス唯物論者の多くが創発を捨てて生氣論に傾いたことを思えば、靈魂の存在は残しながらも、ラミの方が大筋では彼ら以上に19世紀以降の唯物論につながる方向に向かっていると考えることができる。その姿勢は、生殖を論じる部分でも生かされている。この時代は、精子などの顕微鏡的観察に基づいて精子のうちに出来合いの小人を認めるような前成説的な議論が盛んになってくる時代に当たっているが、ラミは、精液が、身体を構成するあらゆる分子の混乱した集合である体液と、あらゆる身体的な運動と機能を行いうる精気との混合物だと考えて、諸器官を構成するにふさわしい分子同士が徐々に集まって諸器官さらには身体が新たに形成されていくという方向で、果敢に後成説を説いている。精気の位置づけに曖昧さが残るとはいえ、神の創造や目的に頼らずに機械論的に徹底しながらラミは器官の形成を説明しようとするのだ。

しかし、ラミは靈魂の存在を否定できない。もちろんそれは、デカルトの場合のように身体と峻別される実体ではなく、動物精気という微細な物質であり、脳や神経や感覚器官といった身体各部と相互作用するものである。精気は、デカルトやウィリス同様、血液のうちの精緻な部分で、それはさらに古典的な四原素説にしたがって「火」と呼ばれる。この精緻な「火」が脳で血液から分離されて精気となり神経系に広がって靈魂として働くわけである。こうして、デカルトやマールブランシュのように心身を峻別した場合には不可能な心身の相関が、物質同士の関係としてラミにおいて可能となる。

しかもこの相関は個体レベルを越えて、世界大のものとして構想される。「世界靈魂」という非常に古くさい響きを帯びた言葉が登場するのはここだ。動物精気である「火」が太陽を源泉として世界中に広がって、ちょうど動物精気が身体を動かすように、「土」や「水」や「空気」からなる世界を統治し生かしているというわけだ。したがって、世界靈魂が登場してもおかしくはないのだが、原子論や機械論と世界靈魂との共存に、どうしてもわれわれは違和感を抱いてしまう。そして、世界靈魂から見れば、各靈魂は世界靈魂の一部分とされることになる。個々の動物の生と死は、そうした「火」の離合集散として相対化され、靈魂は自然的には滅亡することになる。

この辺りの靈魂觀をどう評価したらよいのだろうか。それが、靈魂不滅を危険にさらすような異教的な知であることは確かで、その辺でラミの著作が物議を醸したことはいうまでもない。彼は理性と信仰を峻別する二重真理説によってなんとか不信仰の嫌疑を避けようとしているが。

だがここでは、信仰との関係は一旦置いてそれを考察することにしよう。問題は明らかに、物質の運動の盲目的必然性と、その必然性に支配されるはずの「火」や精気や靈魂が有する身体や世界を支配する主体性との間にある。哲学的には、必然性と自由というアポリアがそこに関わっており、現在でもこうした問題系に万人が納得するような答えを与えることは不可能である。したがって、問題を歴史的なものに絞って考えることにしよう。歴史的には、ラミは、17世紀科学革命の最中であって、人間の身体や活動を含む自然を、徹底して力学（機械論）的に捉え、実験や支配の可能な客体にしようとする方向性と、社会的・道徳的に人間が、教会や村社会、領主、同業組合などへの依存を脱して、近代的な主体になろうとする方向性という、デカルトの二元論が一面で体現した二つの方向性に直面しながら思索していると考えることができる。そうした文脈にラミを置くと、その靈魂觀を、上の両方向性を一元的世界觀のうちに統一しようとしながら、それが叶わなかったことの、証言と見ることができそうである。ガッサンディもウィリスもそしてラミも、感覚や思惟や意志の活動を物質化しようとしながら、それを司る特殊な実体を置かずにはおれない。その実体が伝統的に靈魂として通用していて、結局それに彼らは飛びついてしまうのだ。こうして、自然を一方で機械論化しながら、靈魂という精霊信仰の残滓である主体が残ることになる。

このような靈魂・身体觀が展開される『解剖論』であるが、今回の校訂版には、初版から取られた本論の後に、第二版になってつけ加えられた、パリ大学医学部のピエール・クレセによる批判への反批判が付されている。これによって、ラミの側から見たものではあるが、ガレノス派とラミとの対立の中身を具体的なエピソードや当時の雰囲気も含めて知ることができる。理論的には、反批判は、エピクロス擁護、機械論の立場からするガレノス派の目的論批判、二重真理説＝信仰主義に立った信仰告白などから構成されている。

次に、『感覚的靈魂の機能の説明』について簡単な紹介を行うことにする。これは、『解剖論』の靈魂・身体觀を、感覚、情念、意志的運動の説明に応用、展開したものである。感覚について興味深い点は、五感ではなく、渇き、飢え、愛の快樂という三感を加えて八感があり、感覚器官

も八つあるとしている点、感覚の発生を、作用粒子の性質や運動、形態、それらの感覚器官への作用、感覚器官から神経系を通じて脳に至る過程での精気の全体的な運動という、総体が生み出す結果として分析し、感覚的靈魂を物質的なものとしている点、その結果、いわゆる二次性質も、作用物体の性質ではないが単に主観的な性質でもなく、感覚的靈魂の生み出す物質的な性質とされる点などが挙げられる。情念は、外部感覚のようにある器官＝心臓で生み出される感情であり、客体の影響を受けて脳にある動物精気が心臓に流れ込み流れ出る仕方に応じて、七つに大別される。このように、情念も徹底的に生理学的に説明されていく。さらに、意志的運動は筋肉運動に置き換えられて、静脈と動脈と毛細神経からなる筋肉に、瞬時に動物精気が流れ込むことによって起きると、これもまた生理学的に説明される。しかし、意志のなんたるかは結局明らかではないが。

いずれにせよ、ここでのラミは、先程述べたような身体を支配する主体としての靈魂という亡霊から比較的自由に、感覚的靈魂の機能を徹底して解剖学的生理学的に説明して、唯物論的な傾向を強く示している。ラミから百年近く経って、18世紀半ばに、ラ・メトリーは『靈魂の自然誌』を書き、ディドロは『百科全書』の項目「靈魂」の補遺で神学的靈魂観から「靈魂の実験物理学」への転換を説く。だが、ラミはまさにその方向性を既に17世紀後半に踏み出していたのだ。

赤木は前掲書で、デカルトの「方法」と自由思想との結合は17世紀末のフォントネルまで待たねばならないとしているが、ラミについてはどう評価するのだろうか。驚くのは、彼がそこでラミの名すら挙げていない点である。懐疑、偏見の批判、権威・伝統の否定、理性の信奉、自然科学への依拠といったことが、デカルトの「方法」をさすと思われるが、今見てきたように、ラミにはこうした「方法」がはっきりと見られるばかりか、校訂者も指摘するように、デカルトの著作との内容的な影響関係もある。こうして、本書の出現で、赤木の展望してみせた「17世紀のリベルタンとデカルト思想」の風景を再検討することを、われわれは早速迫られることになる。

また、「解説」でミネルビ＝ベルグラドも注目するように、「火」を靈魂の原素としながらも、組織があって始めて感性が創発すると見るような創発主義的発想をラミが取ったことを、既に若干触れたが、思想史的にどう評価するかも、今後の重要な課題である。「創発」が現代の「複雑系」の自然観を示すキーワードの一つになりつつあるだけになおさらである。

また、A・ヴァーテーニアンなどが強調し、校訂者もそれに依拠する、デカルトからラ・メトリーやディドロに至るデカルト主義の「唯物論的歴史」があるとして、その流れの中で、ラミはいったいいかなる位置を占めるのか、はたして、校訂者が述べるように、ラミはその嚆矢といえるのかという点も重要な検討課題である。

その際に、上で述べたように、ラミが古い靈魂観に足を掬われている面もあることを、歴史的に的確に位置づけることを忘れてはならない。特に、ラミなどの場合、どうしても「忘れられた先駆者」として過大に見積もる危険性がつきまとうだけになおさらである。